

## 生活科における探究的な学び

和歌山市立有功東小学校	林 真希
和歌山市立雑賀小学校	赤松広志
和歌山市立宮北小学校	赤井泰子
附属小学校	田中伸一
教職大学院	畑下圭喜

### 1. 本研究の目的と概要

本研究は、和歌山大学教育学部附属小学校の教員と、和歌山大学教育学部の教員が連携し、授業改善や新たな指導方法を生み出すことを目的としている。

研究代表者を教職大学院の畑下とし、附属小学校から田中（2年生担任）が連携し共同で研究を進めることとした。さらに、本年度は市内公立小学校から3名の先生方が参加してくださることとなった。

### 2. 今年度の研究課題

本年度の研究課題を“生活科における探究的な学び”とし、児童が主体的に対象にかかわっていく中で、課題に直面した時、課題を共有し、原因を見つけ出し、解決策を考え、何度も解決策を試し続けていけるような生活科の授業内容・教材開発について研究を行うことにした。

### 3. 本研究の活動概要

#### 附属小学校教員の実践

年間を通して、生活科における探究的な学びを育むために、栽培活動に取り組んだ。1学期は夏野菜を栽培し、野菜を育てるうえで必要な生育条件や環境に目を向けるよう取り組んだ。2学期からは、1学期の栽培活動の経験を活かし、生育条件や環境について経験し学んだことをもとに、土に焦点を当て、土作りからの栽培活動に取り組んだ。また、子どもたちが栽培している野菜に愛情を持ちかかわっていくために、1人1袋で野菜を栽培させた。毎日の世話・観察に重点を置き取り組み、野菜の成長や様子の変化に気付くことができ、課題発見につながった。課題の発見は、子どもたちの問題意識になり、原因の探究につながった。

た。原因の予想や発見により、子どもたちが解決策を考え出すことができた。解決策を一度試して、うまくいかなかった時は、結果を整理し、課題をより明確化した。この課題に対して、より具体的な解決策を考え出し解決するまで取り組み続けることができた。これらの継続した栽培、課題に対する取り組みは、子どもたちにおいて探究的な学びを経験する上で大きな力になったといえる。

#### ～探究的に学ぶ児童の様子～

K・K（以下K）はヨトウムシによる初めての被害があったとき、周りをゴミ袋で覆う作戦を取った。理由は、周りをゴミ袋で囲むと、虫は入ってくることができないと考えた。

しかし、ヨトウムシによる被害は続いた。そこで成果と課題を整理した。ヨトウムシはヨトウガの幼虫であることを調べたことを使って、原因は上が開いているから、そこから入ってくるのではないかと考え、改善策を考えた。Kは隙間なくゴミ袋で覆う作戦に取り組んだ。その後はヨトウムシによる被害は減ったが、大根の成長が悪くなった。そこで、成果と課題を整理した。成果は、ヨトウムシが入ってくることができなくなった。課題は、大根が枯れそうになっている。ここで、野菜を育てる上で必要になる日光と通気性という条件が抜けていることに気付き、再度改善策として空気穴をつくった。理由は、日光を取り入れ、風通しもよくできると考えたからだ。

それでも大根の成長は良くならなかった。Kはゴミ袋の中を覗き、日光が入ってきにくいのではないかと考えた。課題を解決するために必要な条件は、ヨトウムシが入らない大きさの穴があり、その穴から日光も風も通る素材を見つけるという具体的な解決策へと向かい、スーパーに買い物に行ったとき台所の三角コーナー水切りネットという素材に出会い、自身で納得のいく解決策を見つけることができた。



写真 ネット作戦の取り組みの変化

#### 4. 成果と課題

1人1袋での栽培により子どもたちは朝、昼休憩に毎日野菜の世話や観察に向かっていた。初めは毎日水やりをしていた子どもたちだったが、野菜について自ら調べていくことにより、土や天気の様子を見て、水やりの頻度や量を調整しながら世話を続けていく姿が見られた。大根が枯れそうという問題に直面した時、原因を調べよう、自分の大根を元気に育て

たいとする姿が見られた。自分が問題に直面する、もしくは、友達が直面した問題を共有することにより、一人一人が自分が大切に世話している大根のことを思い問題解決に取り組んでいくことができた。今回の実践では、課題の発見→課題の共有→原因の調査→対策を考える・実行→整理（成果と課題）→課題（問題）の共有を何度も繰り返しながら取り組みことができた。初めは漠然とした原因に対する漠然とした対策であるが、何度も試していく中で、より原因が明確化され、それに伴いより具体的な解決策を子どもたちが主体的に考え続けることができたことに大きな意義があったと考えられる。

今後の課題としては、さらに多くの授業を参観・協議を行い、子どもたちの気づきや思い、課題意識を把握し、1人1人の探究的な学びになる課題であるかをより明確にすることである。また探究的な学びに向けた新たな教材を模索することである。